

心の哲学は単一の専門領域なのだろうか

鈴木貴之 (Takayuki SUZUKI)

南山大学

心の哲学には、命題的態度、意識経験、感情、認知など、さまざまな研究対象がある。それらをめぐる問題も、存在論的な問題から、心理学や認知科学における具体的な理論の是非をめぐるものまで、さまざまなものがある。それに加えて、心の哲学には、さまざまな方法論的、メタ哲学的な立場があるように思われる。本発表では、この点に着目し、心の哲学はどのようなメタ哲学的な立場を前提としてきたのか、どのようなメタ哲学的な立場を受け入れるべきなのか、そもそも、心の哲学は単一の方法論を持つ単一の専門領域と言えるのか、といった問題について考えてみたい。

自由意志論争にかんする分析などを参考にすれば、心の哲学にかんするメタ哲学的な立場としては、少なくとも以下の三つのものが考えられる。

第一の立場は、心の哲学の仕事は、心に関連するさまざまな概念の内実を明らかにすることだ、というものである。われわれは、(そのような言葉で呼ぶかどうかは別として) 信念、欲求、意図的行為、合理性、クオリアなど、心にかんするさまざまな概念を持ち、それらは、日常的な実践の中でも重要な役割を果たしている。しかし、これらの概念が厳密に言ってどのようなものであり、相互にどのように関連しているのかは、明らかではない。この立場によれば、心にかんする常識的な概念枠組の全体像を明らかにするのが、心の哲学の仕事なのである。

このような立場では、仮想的な事例にかんする思考実験などによる概念分析が、哲学的探究の主要な方法となる。しかし、心の哲学の目的が素朴概念の解明にあるのだとすれば、哲学者による概念分析が適切な研究手段であるかどうかは疑わしい。近年の実験哲学研究によれば、哲学者による概念分析と、一般人を対象とした調査研究の結果は、かならずしも一致しないからである。さらに、認知科学における概念研究の知見をふまえれば、概念の必要十分条件を明らかにするという試みは、不毛かもしれない。

また、哲学的な問題が素朴概念にかんする誤解に由来する場合を別にすれば、素朴概念の解明は、哲学的にとくに興味深い課題ではないように思われる。

心の哲学には、認知は記号計算か、感情は表象状態の一種か、ヒト以外の動物はメタ表象を持つことができるか、といった問いが数多く含まれることを考えれば、心の哲学は、基本的には、実在する心そのものの探究だというのが、より自然な見方だろう。

第二の立場は、この点を認め、心の哲学を自然科学と類比的に考えるものである。この立場によれば、心の哲学の目的は、広義の自然種の探究である。すなわち、われわれにとって興味深い心的現象について、その典型例に共通する因果的メカニズムを解明することなどを通じて、自然界にそれ自体として実在する心的現象のカテゴリー

やメカニズムを正しく記述できる概念枠組を構築することが、心の哲学の目的である。このような見方によれば、心の哲学は、本質的には理論心理学だということになり、心理学、認知科学、神経科学などと連続的な、経験的探究だということになる。この立場では、概念分析は重要な役割を果たさないことになるだろう。

意識の本性をめぐる議論、認知の本性をめぐる議論、心の理論をめぐる論争など、心の哲学には、この立場がうまくあてはまる問題領域は多くある。しかし、心の哲学の営みすべてを、この見方に収めることは困難である。たとえば、デイヴィドソンが言語と思考の本質的な関係について論じるとき、彼は動物行動学のデータを説明できる理論を構築しようとしているわけではないだろう。

ここで、第三の立場を考慮する必要が生じる。第三の立場も、第二の立場と同様、心の哲学の仕事は実在の探究だと考える。しかし、この立場によれば、その実在とは、経験科学の対象ではない領域である。たとえば、世界には因果性の領域と合理性または規範性の領域があり、一方を他方に還元することはできないと考える人々は、自らの営みを、このように特徴付けるかもしれない。自然科学は因果性の領域を探究するものであり、哲学は合理性の領域を探究するものなのである。合理性や規範性を手がかりとして、言語、思考、真理などのあいだの本質的な連関を見出そうとするデイヴィドソンの営みは、このようなタイプの探究の一例とみなすことができるかもしれない。

しかし、このような見方をするためには、物理主義を否定するというような、一定のコミットメントが必要となるかもしれない。また、なぜ、規範的な領域が、概念分析や哲学的直観といった分析哲学の標準的な方法によって探究できるのかを説明する必要もあるだろう。

いずれの立場も、心の哲学のすべての営みを統一的に理解可能にしてくれるわけではないように思われる。ここから、心の哲学には単一の方法論は存在するのだろうか、という疑問が生じる。発達心理学の経験的な知見をふまえて、心の理論は理論的知識にもとづくのか、シミュレーションにもとづくのかを議論している人々と、ある人の信念のほとんどが誤りだという想定が意味をなすかどうかを議論している人々は、心について論じているということ以上に、実質的な共通点を持つのだろうか。心の哲学は、理論心理学と、概念分析的でアプリアリな営みに、分裂することになるのだろうか。心の哲学の今後を考えるうえで、われわれは、このようなメタ哲学的な問いを真剣に考える必要があるように思われる。